

# 久<sup>く</sup>楽<sup>らく</sup>分<sup>ぶん</sup>教<sup>きょう</sup>会<sup>かい</sup>

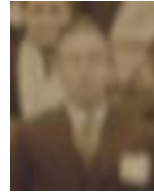
設立・昭和43年10月24日

祭典日・20日

兵庫県西宮市



初代会長  
芦田 むつ



初代配偶者  
芦田長次郎



二代会長  
清水 基弘



二代夫人  
清水 里子

昭和四十三年十月二十四日  
初代会長 芦田 むつ 任命

平成元年八月二十六日  
二代会長 清水 基弘 任命

久楽分教会の初代会長芦田むつは大見豊松、きぬの娘であるが、大見一家は早くから家島より大阪へ移住していた。両親は大正のはじめ頃三女の身上から熱心に信仰するようになった。むつの姉と、糸は大正六年、後の飾大の初代会長となる竹川萬次に嫁いだが、むつも陽気なお道が好きで飾大宣教所へよく運んだ。芦田長次郎と結婚し、昭和二年六月おさづけの理を拝戴してから、夫とともに信仰するようになった。次女が出直したのを節に、昭和十四年九月教校別科六十三期を志願し翌年二月に修了した。

昭和二十七年三月の夫の身上、三女の出直しという度重なる節によって道一条を決議し、その月の末飾市布教所を開設した。場所は芦屋市前田町十八番地であった。しかし翌二十八年三月に夫長次郎が出直した。こうした重なる節ごとに成人して飾大へ日参し、またおたすけに運び、次第によぶべく信者も増えたので

西宮市苦楽園三番町五番二十五号にて神殿ふしんをし、教会設立を出願して昭和四十三年十月二十四日、久楽分教会設立のお許しを頂いた。時に芦田むつ六十七才である。



震災後復興なった現在の教会

その後たすけ一条にとめて教祖九十年祭、百年祭をむかえさせていただき、

教会の御用を懸命につとめていたが、昭和六十年頃より身上がすぐれず、教会の御用が出来にくくなってきたので、飾大の青年づとめをしていた清水基弘が教会の御用をつとめる事になった。



神殿上段

清水基弘は清水藤吉、こよの長男であり、初代芦田むつの甥である。

清水基弘は大阪市西区で軽食喫茶店を経営し、信仰にも励んでいた。昭和三十五年四月にはおさづけの理を拝戴し

ていた。商売の方も順調にいつていたが、昭和五十年オイルショックと重なって、身上事情のお手入れをいただき、昭和五十年十一月修養科四一三期を志願、修了後は家族そろって飾大分教会に入り込むこととなる。

昭和が平成に変わり、その年五月二十八日芦田むつ初代会長が八十六才をもって出直した。

葬儀も済み後継者の問題が持ち上がり、初代の長男芦田和太郎もよふぼくではあったが、事情があつて辞退することになった。上級飾大の会長、役員の岩竹夫妻、和太郎も加わつてねり合い協議した結果、清水基弘を二代会長とすることとなり、平成元年八月二十六日お許しを頂く。基弘五十三才であつた。

平成七年一月十七日未明の阪神淡路大震災によつて、教会の建物は大きな被害を受け、ついに倒壊するという大きな節に遭遇した。

一日も早い復興を望むのは、教会長をはじめ信者一同の切実な思いである。しかしながら、余りにも大きな被災に、何から如何に手をつけるべきか途方に暮れ

る中、真柱様の早く立ち上がってくれよとの親心からなる（復興の種）を頂戴し、皆々の心が確と定まった。をやの声にお応えして、ちばの理をいただくよふきぐらしの道場復興への勇み心が一つ心に束ねられたのである。



阪神淡路大震災で教会は全壊した

平成七年十月二十四日神殿建築のお許しを戴いた。普請にあつてはよふぼく信者が一手となり、教会の復興を第一にと考え、自らも被災を受けたよふぼく達が真心を尽くして努め励んだ。同年十二月に基礎工事が完了し、翌平成八年二月一日、上級飾大分教会長祭主の下上棟式

と工事は順調に進んだ。被害地の中の教会の速やかな復興に、多くの人達が驚嘆

したという。一途に信仰する人々の真実の大きいことに改めて眼を見張ったのである。



前真柱様からのお葉書

ある。平成八年五月十九日神殿落成奉告祭を執行した。清水基弘会長をはじめ、この復興普請に全てを傾注し成し了えたよぶべく信者のうち足りた喜びは諭えるに言葉がない。感激づくめ、喜びづく

めの奉告祭がつとめられたのである。

清水会長はその喜びから、前真柱様に復興成った神殿の写真を添えて、お札の手紙を綴ったところ、前真柱様から直筆の返事を頂戴した。短い文章に込めるをやならではのお心に、更なる喜びを深めると共に、前真柱様のお言葉を「新たな出発の種」として、清水基弘会長夫妻は後継者の正臣夫婦家族一丸となつて布教に努め、教会内容充実に邁進している。